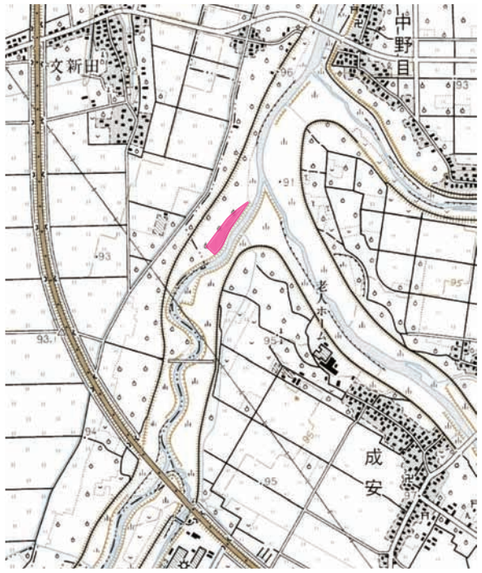
川前２遺跡第４次発掘調査説明資料

財団法人山形県埋蔵文化財センター 2008.10.27（月）

調査要項

遺　跡　名	川前２遺跡
遺跡番号	平成 13 年度登録
所　在　地	山形市大字中野目字赤坂
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査原因	須川河川改修下流部事業
調査面積	４，５００㎡
現地調査	平成 20 年５月 12 日～ 10 月 31 日
遺跡種別	集落跡
時　　代	弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代
遺　　構	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡、遺物集中区
遺　　物	弥生土器、土師器、須恵器、砥石
調査担当	調査課長　長橋　至
	調査課長補佐　伊藤邦弘
	主任調査研究員　小林圭一（調査主任）
	調査員　吉田江美子
調査指導	山形県教育庁文化遺産課
調査協力	山形市教育委員会
	中山町教育委員会
	山形県教育庁村山教育事務所



遺跡位置図（山形北部　1/25,000）

１．調査の概要

川前２遺跡は山形市と中山町の二つの市町にまたがり、山形盆地の西部を北流する須川左岸の自然堤防上に位置する、古墳時代から奈良･平安時代にかけて人々の生活が営まれた遺跡です。

発掘調査は国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所による須川河川改修下流部事業に伴って、2002 年に第１次調査、2003 年に第２次調査、2007 年に第３次調査が実施され、今回の調査は第４次調査に当たります。第１・２次調査では奈良・平安時代の住居跡が多数検出され、当時のムラにおける生活の様子が明らかになりましたが、その調査でさらに下層から、古墳時代の生活面が確認されたため、第３・４次調査は奈良・平安時代の調査面から 20 ～ 100㎝程度を掘り下げて実施しました。その結果、古墳時代前期（４世紀代）の住居跡が多数検出され、また掘り込みを伴わない土器の出土状況が随所に認められ、川沿いに展開した古墳時代のムラの様子が明らかになりました。

２．検出された遺構と遺物

今回の調査で見つかった遺構は、竪穴住居跡 32 棟、掘立柱建物跡１棟、溝跡７条、土坑 17 基、河川跡、掘り込みを伴わない土器集中地点などです。

竪穴住居跡は、古墳時代前期８棟、奈良・平安時代 15 棟、時期不明９棟で、調査区中央の微高地で同時に検出されました。古墳時代の住居跡は、いずれも４世紀代につくられたもので、一辺６～８ｍの隅丸方形で４本の柱穴や壁溝が検出されました。住居跡の床面からは、土器（甕・壺・高坏・器台など）がつぶれた状態で出土しましたが、ST19・29 の大型の住居跡の壁際には、方形の掘り込みが認められ、中から完形の壺や甕が出土しました。このような掘り込みは ST34 でも検出されており、川前２遺跡の古墳時代住居跡の特徴となっています。古墳時代の住居跡の床面は硬くなっており、その中央に炭化物の広がりや地床炉が認められ、煮炊きなどの火をたく行為がなされていたと考えられます。

奈良・平安時代の住居跡は、８世紀代につくられたものがほとんどですが、９世紀代の住居跡も２棟検出されました。一辺４～６ｍの方形で、古墳時代よりも規模が小さく、床面には粘土が貼られ、硬い面が少ないといった特徴がみられ、柱穴が検出された住居跡は僅かでした。住居跡のいずれにも煮炊きするためのカマドが構築されており、カマドの周囲から坏などの須恵器や甕などの土師器がまとまって出土しました。ST11･12 では埋まった土の上層で、黄褐色の粘土が凹レンズ状に堆積しており、住居が使用されなくなった後に、洪水で埋没したことがわかりました。奈良・平安時代の住居跡は、古墳時代の住居跡を壊してつくったものが多くみられ、古墳時代～平安時代を通じて、断続的ながら同じ場所に居住が繰り返されていた様相が明らかになりました。

土坑は地面を掘り込んだ穴で、17 基検出されました。性格や年代のはっきりしないものがほとんどですが、SK19 には焼けた土が埋まっており、弥生土器（甕）の破片が出土しました。これまでの調査でも、弥生時代の遺物が少々見つかっており、川前２遺跡には弥生時代から人々が住んでいた可能性が考えられます。

調査区の東南部から中央にかけた場所では、古墳時代前期の土器（壺・甕・高坏・器台・小型壺など）が多数出土しました。いずれも地面を掘り込んだ形跡が認められず、特定の場所に集中したり、意図的に土器を置いた状態で出土しました。出土した土器のほとんどは、古墳時代前期の４世紀代に位置づけられますが、古墳時代中期の５世紀代の土器も一部出土しています。調査時の観察では、壺（小型壺含む）・甕・器台・高坏が多く出土しており、鉢・坏・椀は少ないようです。壺は貯蔵用、甕は煮沸用の器ですが、小型壺や高坏・器台は特別な行事などで用いられたと考えられています。

３．まとめ

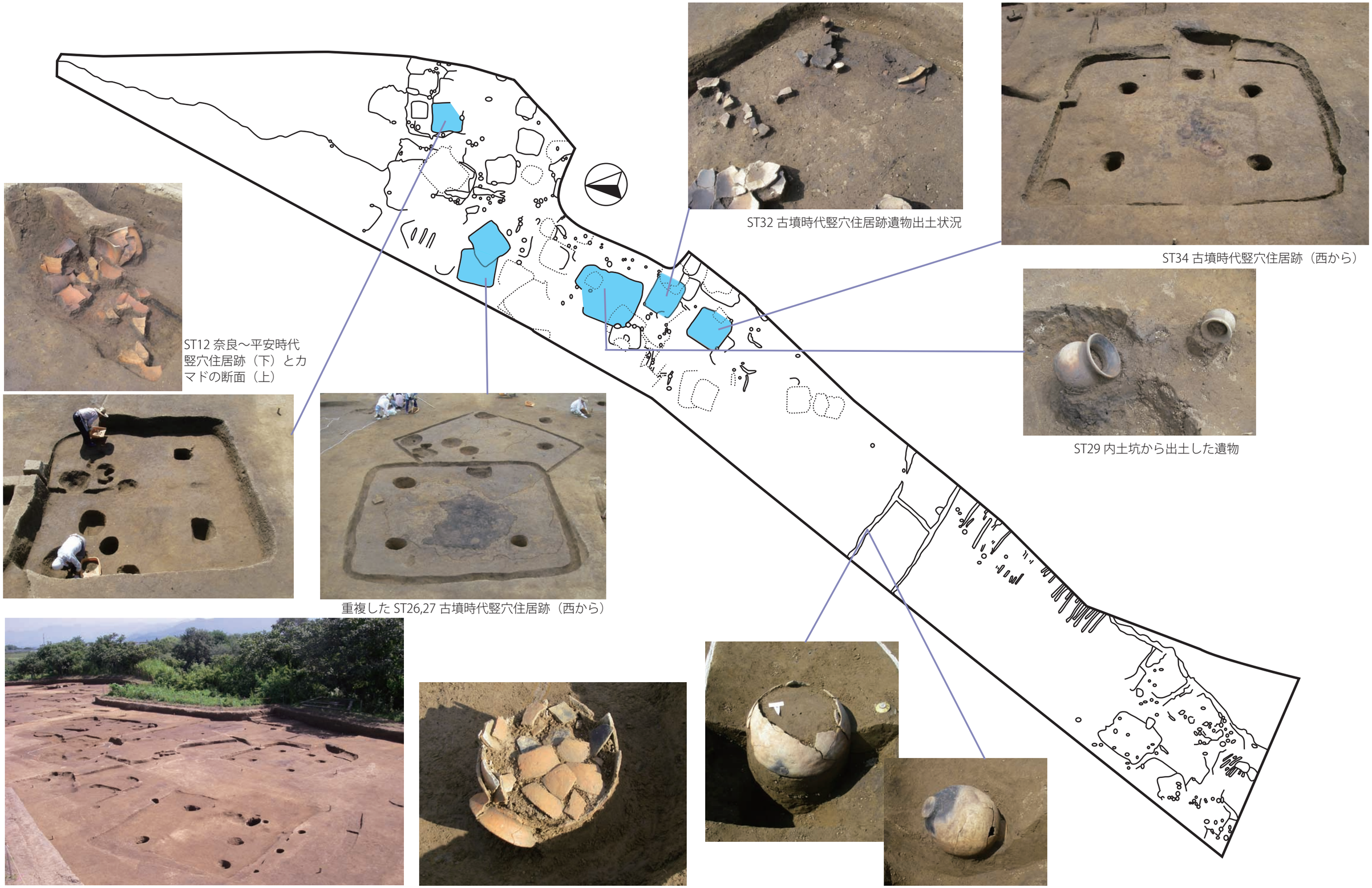
今回の調査では、古墳時代前期（４世紀代）と奈良・平安時代（８世紀代）のムラの跡を検出しました。いずれも調査区中央の微高地に重複してつくられており、冠水の被害を受けにくい場所を利用していました。また調査区の南側では、古墳時代の遺物の集中地点が検出されましたが、検出された地点は、居住域からやや離れた場所であることから、日常的な生活の場所と儀礼などを行った場所が、ある程度区別されていたことが明らかになりました。

小学生体験発掘

第３次調査でまとまって出土した小型土器

川前２遺跡が位置する須川下流域は、最上川との合流点が近く、白川（馬見ヶ崎川）や立谷川も合流しており、水運の便に適した地域であったと考えられます。しかし当時は高い堤防がありませんでしたので、増水時には洪水の危険に常にさらされていました。今回の調査でも冠水で堆積したと思われる砂質土や粘土層が、古墳時代の面を広く覆っており、その上に平安時代のムラが形成されていました。川前２遺跡のムラは、水運の要衝として発達したと考えられますが、古墳時代に土器を意図的に配置し、火を焚いた跡のような儀礼の場が設けられていたことから、洪水を回避するための祈願や儀式がムラの中で - 行われていたものと思われます。

今回の調査では、古墳時代と奈良・平安時代の川沿いのムラの様相が明らかになりました。須川との共存をはかるために、当時の人々がどのような働きかけをしていたのか、その一端が示されましたが、水運の要衝としての地の利が重要視されていたからこそ、度重なる水害を克服していったのかもしれません。今後発掘成果の整理を通して、川前２遺跡の性格や歴史的変遷をさらに明らかにしていきたいと考えています。


ST12 奈良～平安時代
竪穴住居跡（下）とカ
マドの断面（上）
ST32 古墳時代竪穴住居跡遺物出土状況
ST34 古墳時代竪穴住居跡（西から）
ST29 内土坑から出土した遺物
重複した ST26,27 古墳時代竪穴住居跡（西から）
調査区北半完掘状況（南から）
調査区南東部から出土した古墳時代の赤彩壺
SG2 河川跡出土壺とその中に逆さに
して収められた甕。祭祀跡か？
0
20m
調査区概要図（1/600）